

佐藤弘夫著

『死者のゆくえ』

(岩田書院・二〇〇八年)

山田 雄司

本書は、日本中世思想史研究の第一人者佐藤弘夫氏による、「死」の觀念の通時的研究である。佐藤氏は近年、『偽書の精神史―神仏・異界と交感する中世―』（講談社、二〇〇二年）、『日蓮―われ日本の柱とならむ―』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）、『靈場の思想』（吉川弘文館、二〇〇三年）、『概説日本思想史』（編集委員代表、ミネルヴァ書房、二〇〇五年）、『起請文の精神史―中世の神仏世界―』（講談社、二〇〇六年）、『神国日本』（筑摩書房、二〇〇六年）、『日蓮』立正安国論』全訳注』（講談社、二〇〇八年）といった著書を相次いで刊行されており、どれも高い評価を受けている。

「あとがき」によると、本書のテーマである「死」の問題は、今世紀に入ったあたりから関心をもって研究を進めてきたテーマであるとしており、事実、本書執筆の元となったと目される「板碑の造立とその思想」（『東北中世史の研究』下巻、高志書院、

二〇〇五年）、「靈場―その成立と変貌―」（『中世の聖地・靈場』高志書院、二〇〇六年）、「神仏習合」論の形成の史的背景（『宗教研究』八一―二、二〇〇七年）などは、二〇〇〇年以降の論考である。そのため、本書の内容は氏の最新の問題関心をまとめたもの、かつ研究上の到達点を示したものと見える。

以下に目次を示す。

序 章 死の精神史へ―方法と視座―

第一章 遠野物語の世界／二 柳田説の再検討

第二章 風葬の光景

一 心象の化野／二 撒かれる骨／三 古代人における生

と死／四 死者はどこに行くのか／五 古代人の他界観

第二章 カミとなる死者

一 巨大墳墓の時代／二 古墳の思想／三 墓と樹木／四

死霊からカミへ／五 王権を守護する天皇霊／六 死霊と

御霊

第三章 納骨する人々

一 八葉寺の夏／二 拡大する彼岸世界／三 骨に憑く

霊／四 この世に留まる死者／五 往生を拒む人々

第四章 拡散する靈場

一 青葉山植物園の板碑／二 板碑の建立と浄土往生／三

創られる靈場／四 勝地と境界／五 靈場を拒否する人々

第五章 打ち割られた板碑

一 破棄された板碑群／二 供養塔から墓標へ／三 縮小

する他界／四 墓に憩う死者／五 菩提寺の時代
終 章 死の精神史から

一 異界からの眼差し／二 死の観念の変容／三 生者と死者の精神史／四 死の比較文化論的研究

引用・参考文献一覧／使用テキスト一覧

あとがき

二

次に各章の内容について重要と思われる点を示す。

序章では柳田国男以来の「神にまで浄化される前の故人の霊が別の肉体を借りてこの世に再生する可能性を、この列島に住む人々が深く信じていた」という死生観・靈魂観に對して、「著名な思想家を取り上げてその人物の死生観を再構成したり、死を論じた各時代を代表する著作を羅列したり」するのではなく、「この列島に住む大方の人間が、死をいかなるものとして捉えていたのか、死者をどのような存在とみていたのか、それが時代とともにいかに変化していったのかという問題を、世界観のレベルで総体として明らかにし」、そうした死生観を「時代思想のなかに位置づけ」ることが本書の目的であるとす。

さらに、近年の日本人の遺骨へのこだわりに関して、柳田がこうした問題を取り上げることなく、靈魂にのみ関心を集中させたことを佐藤氏は批判し、「霊と骨・肉両面を視野に入れながら」、「この列島上で展開した古代から現代に至る死者・靈魂

に對する観念とその変容の実態を、死にまつわる儀礼や言説の分析を通じて再構成してみようとする」のが本書の意図である。

第一章では、「ひとたび葬送儀礼が済んだ死体や遺骨に對する無關心は、時代や身分による程度の差はあっても身分階層を問わず、『万葉集』の奈良時代（七世紀）から『餓鬼草子』が制作された院政期（一二世紀）まで、一貫しているようにみえる」と指摘し、「日本人は骨を大切にす」という俗説に疑問を投げかける。「古代人にとって、肉体は魂を入れる容器」であり、「靈魂が二度と戻らないと確定した段階で、遺体はもはや無用の存在」だったことを指摘する。そのため、死の確定後は「人々の関心はもっぱら魂の浄化に集中」し、靈魂は「最終的にはこの世のどこかにあるという、死者の国に落ち着くものと考えられていた」とする。そして、古代においては靈魂がいったん落ち着いても「一貫してそこに留まるという感覚はそれほど強くなかったようにみえる」としている。そうした靈魂は蝶や螢になぞらえられて、山や樹木に住みながら、しばしば生者の元を訪れた。「生者と死者は、一定の距離を保ちつつも、あいかわらずこの世界内部で共存を続ける存在」であったとするのは、古代の靈魂観の重要なあり方だろう。

また、靈魂は生者の身体を離れて「遊離魂」となることもあり、そうした状態になることは生命の危険を及ぼすので、「定期的に靈魂を身体に定着させるための儀式が営まれる必要」が

あり、それが鎮魂祭であり、民間でも「魂の離脱を防ぐための多彩な風習が行われていた」とし、折口信夫の学説を評価する。そして、古代仏教が担ったのは、「靈魂を他界に送り出す」ことではなく、「魂の浄化」であり、そのため「滅罪」が重要視され、「仏教は生前死後を問わない、従来の殯などよりもはるかに有効で速やかな魂浄化の作法として受けとめられた」と、古代仏教の役割について指摘している。

第二章では、古代において死者がカミとされる事例について述べられている。「古墳内部に死者が定住するという観念」は希薄であり、「霊が古墳に常住するという観念と定期的な墳墓祭祀は」、「大規模古墳造営が終末期を迎えた七世紀末に、政治的な意図に基づいて創設されたイデオロギー装置」で、「天皇は神の子孫として、歴代の天皇の靈魂 \parallel 天皇霊によって守護される存在」へと変化したとしている。

それと平行して、神は「社殿に常住するという観念が普及し」、「天照大神を頂点に据えた、神々の世界の再編成」が行われたが、神は「崇るカミとしての非合理的な性格」を引きずっていたとする。そうした「支配者を守護する役割を担った超越的な霊（カミ）の観念の成熟は、その対局に邪悪な意図をもった悪霊 \parallel 怨霊を分立させる契機」となり、それに対応する形で「密教や陰陽道の修法が発達した」とする。

第三章では、古代から中世への変容について述べる。一〇世紀頃から「この世と断絶した死後世界としての他界浄土の観念

が拡大・定着し、古代的な一元的世界観に対する、他界 \parallel 此土の二重構造をもつ中世的世界観が形成され」、「院政期（一二世紀）に至ってついに現世を逆転するに至る」とする。中世人に与った最大の関心事は浄土往生であり、「垂迹」への結縁が希求された。「衆生は垂迹と縁を結ぶことによって、浄土への確実な往生が約束され」たため、一種の垂迹と観念された「生身」仏や仏舍利、聖人が人々の厚い信仰を集めた。また、神社もこの世の浄土とされて民衆の心を引きつけ、寺院には聖人 \parallel 垂迹を祀る新たな施設 \parallel 奥の院が造られ、新たな霊場として人々を向かわせたとする。

そしてそこへ納骨されるようになり、それとともに「死体に対する観念に変化が生じ」、経塚への納骨も行われるようになった。しかし、浄土への往生が果たされたとみなされると、遺骨は「もはや抜け殻」にすぎず、「ひとたび浄土往生を成就した人間」はこの世に帰還することはなかったことを指摘する。一方、「あえて現世に留まることを選択する者」や「善行が不足しているために」往生できない者や、「不幸な最期を遂げた場合、あるいは尋常ならざる死を迎えた場合、その場所に死者の霊が留まる」ことがあり、「浄土往生が理想とされた中世においても、この世にはたくさんの死者が留まっており、それが生者にさまざまな作用を及ぼしている」と述べている。

第四章では、板碑などを素材として、霊場の拡大について論じている。平安後期になると霊場が新たに形成されるのとも

に、「より住居に近いところに簡便な納骨と埋葬の場」が造られていく。また、共同墓地の「一角に惣供養塔が造られ始め」、塔婆に結縁するために納骨が行われた。その供養塔は「万人に対する（開かれた）性格において、特定人物と一対一で対応し、第三者の結縁を完全に拒絶する（閉じられた）性格を基調とする近世の墓標とは、決定的な違いがあった」と指摘している。

「中世の納骨霊場の中心」は「彼岸の本仏の垂迹である」「弘法大師などの聖人、阿弥陀像などの仏像、經典を埋納した経塚、板碑などの供養塔」であった。そして、東日本では「浄土信仰の主流は称名念仏ではなく、板碑を建立し、結縁のためにそこに参詣し納骨する」ことであったとしている。

第五章では、中世から近世にかけての転換について述べている。「一四世紀半ばをピークとして、板碑の建立は急激に減少し、さらに「一五・一六世紀を転換期として、死者のために建立される石塔は、不特定多数の霊魂救済を目的とした供養塔から、特定の人物の遺骸ないし遺骨に個別に対応する墓標」に変化する。「現世中心主義の思想が各方面において公然と主張され」、彼岸世界は縮小した。そして神社は「現世的側面を積極的に強調するように」なった。死者の霊魂は墓標に留まり、生者は「定期的に死者を訪れ、その安穩を祈る義務があった」とする。

発生について議論のある両墓制については、「この世における個々人の霊の居場所を確定しようとする指向性を踏まえた、

近世的な墓制の一つのバリエーション」とし、「骨と霊魂との結びつきに死者が墓に留まるという観念は、年忌・命日法要の義務化といった社会的・政策的な規定に裏打ちされて、中世よりもはるかに強固で持続的なもの」となったとしている。

終章では、一章から五章までのこれまでの議論の要旨をまとめているほか、死生観の他民族との比較を試みており、そこでは、表層的な現象の比較ではなく、「両者の背景をなす世界観にまで目を向け」るべきことを主張している。

三

以上、本書の概要をまとめてみたが、本書は、佐藤氏のこれまでの論考とは異なり、東北地方を中心に、実際に足を運んで目を見た「モノ」をもとに叙述されている部分が多くある。各章の冒頭はそのような具体的事象を提示して、読者をその場に導いてくれるような雰囲気味わわせてくれる。そしてそれを時代の中に位置づけて理論づけを行っていく手法は、全体を通じて成功している。

また、本書の叙述の中心は古代・中世にあるが、古代から現代に至るまで、大変明快に叙述されており、現在における日本人の霊魂観研究の到達点を示した著書と言うことができる。とりわけ、遺骨に対する認識の変化を本地垂迹ならびに浄土観の変化と関連させて説いている点は、本書の論点の中心であり、この説明には大変説得力があり、首肯できるものである。

こうした大変優れた著書ではあるが、同じく日本中世を基点に日本人の靈魂觀を研究している私からして疑問に思われる箇所も若干存するので、主な点を三点提示してみたい。

第一に、本書では肉体と靈魂との關係を追っているのであるが、靈魂は具体的にどのような「モノ」だとイメージされているのだろうか。靈魂はもちろん目に見えるわけではないが、どのくらいの大ささでどのような形状をしていると考えられているのだろうか。そして、肉体のどの部分にとどまるとされているのだろうか。また、中世では「遺骨が白骨化しようとも、靈魂は悟りを開かない限り、基本的には遺骨と一体化してこの世に留まっている」ため、「靈魂を救済するには、その依り代ともいべき遺骨を靈場に納め、垂迹の力によって彼岸に送り届けてもらうのが、もつとも確実な救済の方途」としているが、遺骨は分骨されて納骨される場合が多々あり、その際靈魂は分離するのであるのか、それとも聖地に納骨される骨に憑依すると考えられたのだろうか。本書では靈魂のありかを問題にしているため、こうした点について言及されていないが、靈魂とは何かという根本的な問題についての定義づけが欲しい。

第二に、靈魂觀の変遷を説明していくにあたり、ケガレ觀念の変化についてほとんど触れられていないが、死体に関する意識の変化等、ケガレの問題を考慮する必要があるのではないだろうか。これまでの研究では、九世紀半ば以降のケガレ認識の拡大が指摘されている。こうしたことは靈魂觀にどのような影

響を与えたのだろうか。

また、「神社には、決して納骨がなされることがなかった」理由について、「仏—神間の根本的・固定的な機能の違いに還元することについては賛成」することはできず、「仏」に関する神々の独自性の主張」であり、「神社・靈場は一人でも多くの人間をみずからの膝下を集めるべくさまざまな工夫を凝らし、そのオリジナリティを強調していた」からであるとしている。神社・寺院とも時代にあわせて信仰を変化させてきたことについてはそのとおりであるが、その際、それを過大に評価しすぎることは、事物の本質を見失うことにつながりほしくないだろうか。『諸社禁忌』などに見られるように、各神社では厳密なケガレに関する規定がなされていて、白骨化していない骨に直面すればケガレとなり、そうした人物は一定期間の神社参詣が妨げられるのであるから、まして神社側が積極的に納骨を受け入れるようなことをすれば、神社の根本的なところを否定することになってしまう。このように、神社に納骨されなかつたのは、ケガレとの關係から再考される必要があるだろう。

第三に、序章において、「死の觀念は、コスモロジー・カミ觀念・権力構造・海外交渉といったさまざまな要素を視野に納めながら、広い歴史的・文化的なコンテクストのなかで解き明かされる必要がある」と主張されており、そのとおりだと思われるが、残念ながら本書においてはまだ説明の途中であると言わざるを得ない。コスモロジー・カミ觀念との関連についてはかな

り紙幅を割いて言及されているが、権力構造・海外交渉との関連については深く追求されていない。靈魂観が政治・経済といった社会構造とどう関連するのか、また、中世社会において禅宗の考え方は大きな影響を与えたと思われるが、死者供養のあり方や靈魂観にどのような影響を与えたのか、考察される必要があろう。

以上、浅学の私が書評するのも大変おこがましいが、これまで佐藤氏の論考から多くのことを教えていただいた者から、感謝の意にかけて書評を書かせていただいたことを記しておきたい。

最後に、本書は本体二八〇円＋税と、他の同一書と比べて非常に安価であり、読者にとって内容とともに非常に満足感の高い書籍となっていることに感謝したい。

(三重大学准教授)

荻生茂博著

『近代・アジア・陽明学』

(ベリかん社・二〇〇八年)

井上 厚史

本書は、二〇〇六年二月二六日に急逝した荻生茂博氏の遺稿集である。側聞した所では、著者生前の研究者仲間を中心とした荻生茂博論文集刊行会の方々によって、著者の全論文が読み返され、周到な配慮の下に取捨選択された上で編集されたようである。全部で十六本の論文が、「Ⅰ 幕藩体制の確立と藤樹・蕃山」「Ⅱ 大塩中斎と幕末思想」「Ⅲ アジアの近代と陽明学」の三つの章に整然と配置され、著者の研究範囲の広さと研究対象への徹底的な分析の跡が十分に窺える構成となっている。

通常であれば、この順序に従って読み進めるべきだろうが、本書は末尾に著者自身の手による研究業績一覧が収録されているため、今回はこの研究業績一覧を参考にしながら、執筆された順に論文を読み進めることにした。というのも、著者自身によって作成された研究業績一覧は驚くほど精緻に書き込まれており、一貫した問題意識の下に論文が制作されていた様子が